

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|--|--------------------|------------------------|-------|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士 (文学) Ph.D. | 氏名 (Candidate Name) | 杉岡 幸代 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 論文題目 (Title of Dissertation) シュタイナー幼稚園の創設者E.M.グルネリウスの理論と実践に関する研究 | | | |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee) | | | |
| 主 査 (Name of the Committee Chair) | 教授 | 衛藤 吉則 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 有馬 卓也 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 後藤 弘志 | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 准教授 | 後藤 雄太 | |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation) | | | |
| <p>本博士論文は、世界的な広がりをもつシュタイナー教育の構想者である R. シュタイナー (Rudolf Steiner : 1861-1925) の依頼を受け、幼稚園教育の実践に当たった E.M. グルネリウス (Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius : 1895-1989) の理論と実践を明らかにすることを目的とする。本論は、「シュタイナーの人間観・発達観と幼児教育論」(第一部)と「グルネリウスの思想形成と幼児教育実践」(第二部)の二部構成となる。</p> <p>第一部の第一章では、シュタイナー教育論の基盤に置かれる独自の人智学 (Anthroposophie) 的主体変容論に焦点を当て、その鍵概念である形成力体 (Leib) を軸に、肉体・心・精神のホリスティックな人間形成論の内実を明らかにした。</p> <p>第二章では、シュタイナーの発達観について、三つの七年期 (誕生～歯牙交代期～思春期～成人期) について考察し、人間の本质とされる四つの構成要素 (物質体・エーテル体・アストラル体・自我体) と発達課題との関連をふまえて構造的に描出した。</p> <p>第三章では、幼児期から青年期までの発達論をふまえて、とりわけ、シュタイナーの幼児教育論の中心課題が「正しい肉体の形成」にあり、方法論的には、「模倣」と「模範」が原理となることを指摘した。この観点をふまえて、彼の幼児教育論における、1. 創造的想像力・ファンタジーの重視、2. 興味に発する生き生きとした表象・イメージーションの形成、3. 心身への色彩の影響、4. 模倣とリズムによる言葉や心身の形成、5. メルヘンの読み聞かせを通じた喜びの没入体験、6. 適切な食事や栄養、7. 大人の模範的道德態度に向けられた子どもの模倣、8. 愛と喜びを基盤とした教育、といった実践的特徴を明示した。</p> <p>続く第二部の第一章では、グルネリウスの思想形成と幼稚園創設の経緯を解明するため、家族と神智学 (Theosophie : 1902 年にシュタイナーは神智学協会ドイツ事務局長となる)・人智学 (1923 年にシュタイナーは人智学協会を創設) との関係や、グルネリウスとシュタイナーとの出会いについて解明した。</p> <p>第二章では、グルネリウスが幼稚園教師になるための学びのプロセス、具体的には、1. シュタイナーからの直接教授、2. コメニウスゼミナールへの参加と修了 (幼稚園教師試験合格)、3. ペスタロッチ=フレーベル・ハウスでの教育実習と理論学習 (入手した当時の学籍簿や資料により解明) について整理した。とりわけ、第3の解明は国際的なグルネリウス研究で嚆矢といえる。</p> <p>第三章では、グルネリウスによるシュタイナー幼児教育理論と実践について、1. シュタイナー幼稚園創設前の仮設幼稚園期、2. 最初のシュタイナー幼稚園創設期、3. アメリカでの実践期、4. ヨーロッパ帰還後の順でまとめた。とりわけ、幼稚園創設期以前のグルネリウスによる教育実</p> | | | |

践やヨーロッパ帰還後に関する先行研究は不十分であり、グルネリウスによる実践の全体像やシュタイナー幼稚園の発展過程を知るうえで、本研究の意義は大きいものといえる。

第四章では、グルネリウスがヨーロッパ帰還後、シュタイナー幼稚園教員のために、シュタイナー文献から彼女が重要と思う部分を抜粋して著したDas Wesen des kleinen Kindes（幼児の本質、1971年）を、彼女が重視した下線部分を中心に抄訳することで、シュタイナー幼児教育の理論と実践のエッセンスを浮き彫りにした。

本発表に対し、審査委員からは、まず、第四章はグルネリウスの上記著作についてキーワードを中心にまとめたものなので付録とすることが望ましいとされ、付録への移行が決まった。次に、その付録の出典と引用・解説部分、シュタイナーとグルネリウスにおける宗教・神・家庭理解、シュタイナー幼児教育の今日的意義、の明確化と、ドイツ語の訳語統一や誤字の修正が指摘され、補足・修正することが約束された。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

令和6年6月5日

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)